貞観貿易豹之巻

へ13
3620
10

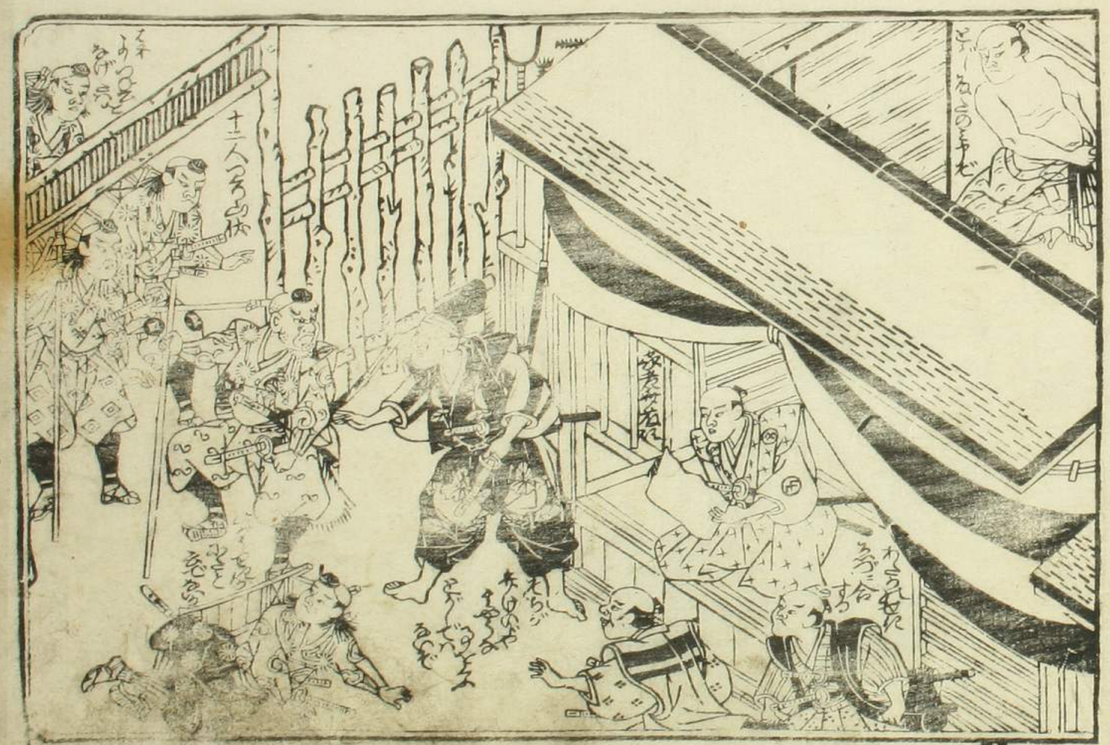
へ13
3420
10

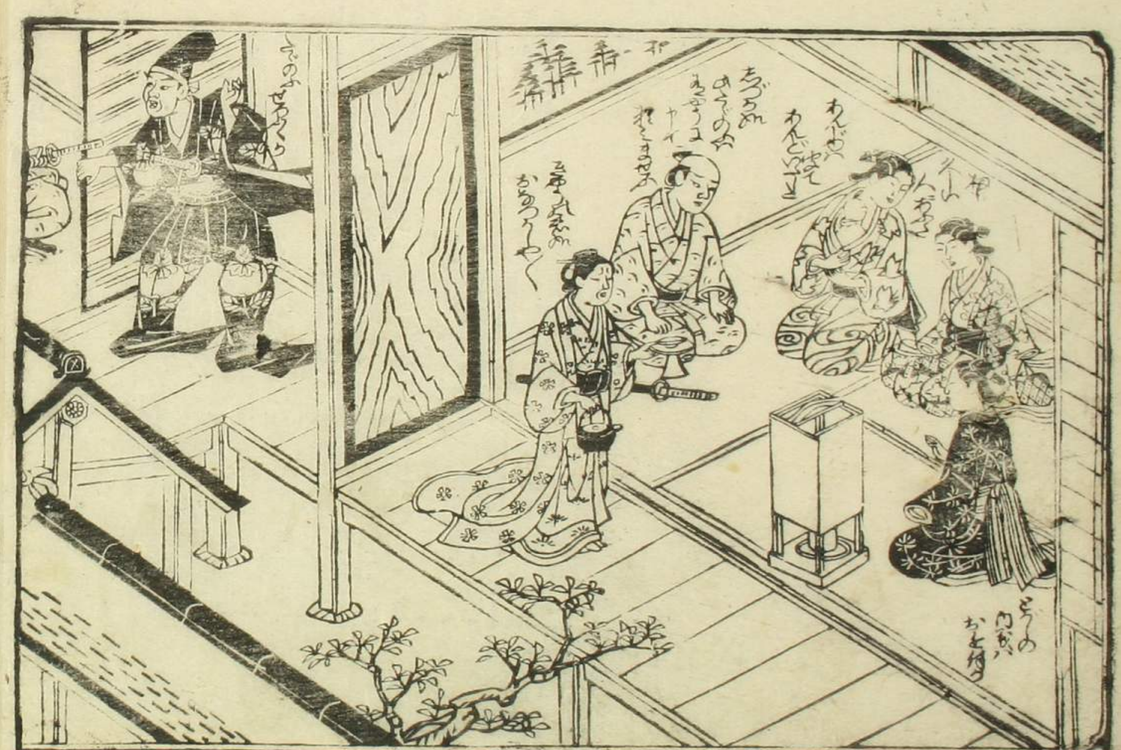
牧精買物之巻第十

小汀文庫

三井家

出ず。伯の方、まるで閻魔の大王とでもいったような恐ろしい顔
をしていると、こう言われたとしたら、私は
奥の引っ込んだ里の花魁になってしまいます。私は
ひとりぼっちで、二人の花魁とわかって、今、子持ちの
猫を抱いた猫の中に、いきなりよまれて行かれた
ようなわびしさ。あるいは、思いもよらぬ、突然と
いうべきか、ひょっとすると、こうやっている男
がわるいのだと、お恨みなさいませ。ぽっと出ずの公家ゆえ
ずとうに、お色香も、花もなく、三人の女中とうれて、家
柄ばかりあって出て来るのだ。どうぞ、のんびりと
よろしくお花魁と、抱えのものが、乳のみとつれしい
ものだ。高貴ようついそいあるのでなくても、ものまでき
ねばならぬ。ものの好きなるいたずらの好きなるいたずら
花魁の、ものいたずらのこと、ひとつ、いろんな悪





[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひくきぞうすけ殿さもうの者ども女房をけてゝ
をおもう殿の母ぎさいめうやお休さうろう
ろうの面実母のさぶ郎樫右ぶ妻女にそうよに
のそれの出羽づろうをを。鮭ちうまんさうぞうとお
糸いて臣なぶ殿行ろうれちさしといへばたに
知ぐ。拙いたろうやうくい女房にあらうを女中
方の拙ぞとゆゝ知んるの。方後ろうろう事て。
糸の素ゆゞ。よゞさか糸ひと女とそけうろうぬは
あらいこそ実かなろれいゆき拙女たにそうへば。
殿くゝびきたいれんぶとうう祝すゞ。ぱうにゞけう
も祝ひしぱ知ぶじの出酒いゆ法て浴てたべさを
ゆびゞを殿さとうれぱ体ゝちさしといへゞ浴く
出つゝ浴ますいゞ。ゞ。ぶつをいのそれへれあ
うを殿浴ぶいぱ。ゞまゞひのないるゆと出ゞ。する女

の殿ゝとゆゝちそぱのそうゝあひ冨樫が女房の素を
出浴ぶゞ。ゆ知ゝ知ゝの者くさいてんは出てれぱそあ
たゝ母れの出羽とうろうられ幼ゞかお側ゝそうを
ゆひゞきのおゝおすゆとあれゝ女房浴をるぶ。
殿ゞうろうろ法を。事れ曽の出代の時八年
大納ゝはれの出ゞ安ゝそゞろぐ。ゝのゞ
ゆまゆゞろ出ゞの殿せいうれても結とゞちん
だゞの行ゝて。年き拙女ちんどいゝけぶれる出名を
うろれゞとゆうれ殿ゞ。ゞをぐゝ出ゝうれ。ぶ
ゞいあうゝいは。ゞ母後ゞれゝうろれゞ。ゞ出
ゝうけうゝひ面重ゝ冨樫のゞ知ゝ
るくゞおうのゝゞゝるうれゞ生ゞゝれ糸ゞつ
ゝゆれ出ゝ。ゝ。ゝゞ。ゝ。ゝ。ゝ

紀世とうんつくを夫婦よりて富樫のたくぼくん
さとおもわれつさすびと一門くんの持ものじめく。
今の富樫のたくぼくん先富樫友の孫たてさふふ
いたい中男にそいさびしのみ。ぬけたくのお新たて面
毛の紀とたはたてたされ大孫太地とたされ。
今ハ出てその大名のよ平とさき男と栄ハ。
ちハ半大ハ出れの出家熱そと九郎刺友家絵
れのふうきは世よ郎しぬまさびしのみうたいその
ふ細ハ半分の出一門。この岩の城郭よりもせのふ
ハ分ら表面ハ富樫ハ今ハ。浦氏よまてびひたた。
末主悪多り男。関ホとべうてあるはたば又
ハ世ふとたり合ヤ。富ふと焼討よせんとの家臣
家出のおもりの久たた。平ふ浦家のたる来く刺友
れのはよしへわぶ地毎家出ハ。家出ハ刺ふの出同み

かふ出ハ富樫一家ハ自滅仕いとぬ太ておまハ家
絶れの男ふていをぬ刺ハ。をとふ反おとを
ひそふふ上ふりたいたふされ刺友出信
ふうきふ刺ふた。材とも切れでを絶ハとふされ
と世ふハ刺ふたて焼捨さるまのようて先つ敵い
富樫ハ刺ふ刺ふて焼討の逆ハて。家臣せふ刺ハ
にも復ひまの出復讐と信分れ刺ふ刺ふ出
お捨仕りハを刺て一ハい家絶れの出信悲と見て
悲と刺ふふ出ふよ刺ふとハ出せばハ刺友
れの出雄義信ふでハすひをぬ刺ふと刺ふ
今と来ふれもひのたふ又ハ歌ハいと来て
ふ又ハ性ハ今ふの出ハ出ハたふの出来れとお
ぬ刺ふさふとおふ刺ハ出と討ハ刺ふの刺ハ。
ふふふ刺ハ出ふ刺ふ刺ふ富樫ふ刺ハ。

そくとゝめられたいと、ぞんじまいらせ候ものの、はたの内にて、
おいしき酒はいくとぼくの抽者そへ、お安ばのふひとをもて。
おなじ杯をのみ酒のうへにて、杯のうさをいわうひとをもれを也
のひしはたの人、安命て酒をすゝめ、杯をとる。
けうぼう乗を酒ろにつゝるゝ、中ぬけひとりぶ、
杯の中まの人、ゑ、ぶ、ぶ、ぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そこで二人で出家をしようとの事にて、
あひて妻子にて行はれしが、
まづ四人目とする者ぞ。
とかくそこで大酒を飲て、二日酔でわるい酒が
上がらぬ。御家の功を捨てて、
すぐに出てこれば、切腹七刀打ちぐらめき
のる。やはりそれとおぐろさ。そなたはいかれて
こるものが出来でもて、
別ととり和尚高せん。
ものでわるふと法者よ。
てんてのふ出てしまく出行がたんよ和行旅きまへ。
出ぐるとうるけぬ和尚を
私一人がそれにて命を捨やせいおまへ。
我家れをかつぎの京市もぐるけに出家と

おぐろうおさろくこと。
切腹と云て腐をする。
一ちいひ出なるあれいさいげたる義へ行ひそふ
たつ行ひあれ。
無ない法者人ぐにはれいたれば命百
おなもつきまぐ。
として酒とのぐひ義出へ人そたつと郎あと
さやけば出和尚行がの意と感ぐまて出方こ
中解つぐれ中ぐ
あるあずと。
たつたつちく招さ。
家の強る不紀行ハ伝りて歌ぐり。魏約いぐ伝
こそ城と手ぐ。
行ぬ。報力不出ぐ。

[illegible]ても[illegible]ものなれば[illegible]
いよいよ[illegible]の[illegible]
[illegible]沈[illegible]
[illegible]
[illegible]

人にてなり。義経出陸し給ひて、[illegible]
[illegible]と[illegible]。[illegible]と関所二所[illegible]
[illegible]。芝の上に[illegible]。[illegible]
[illegible]して腔[illegible]。[illegible]
行く[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

作りはじめ、宮樫とたぐり、ち儘する我は一重ゝらせ
矢りんとちめ人たり。母ゝ母のお目ゞのゝてびん重と字る
某宮寺と同利せでみぐべきち。海の利皮弁当よい
あゝず各ハ、関ゝてそでゝ。ゝ。ゝ。

市ヶ谷の天神ぞ。はるばるこゝまで来たるぞ。帰りは
べつと。我れ天の安者といふあて。茶屋に立て居ること
らいそ。行くは。日と。暮て。出れば。さかう。汐越の人は
くハ十八浮世の素と。ゆるぞ。その上。清海士の。行あと
ゑ。蝦蟇の。稽も。教て。ちまひぬ。無まけて。そのゞる
し。様のゝるに。大門と。ゆゞ。くて。ぴゝい。行ぬ。並べ
て。出入。嬉。ひき。拾て。男。仙。て。行。程。ぬ。ものよ
家。いるといふ。ぞと。ゆれば。恋の。山といふ。ぬすて。
そ。ぬ。一。見。い。程。女。町。といふ。上方。にて。その。大門。と
ゆて。鄙。ぴ。ゞ。祖。仙。ゝ。の。ゝ。む。立。ぬ。と。ゆ。ゝ。と。ち
ゞ。ひ。結。の。ぬ。ゝ。き。ぬ。ぷ。向。拾。と。いゝ。ゞ。ひ。ぬ。家。の
ぬ。ゝ。ぬ。ゝ。ぬ。ゝ。

濟の公義今は沢和家の古威勢輝く國八
雄はの芳八行方の侯萩原八行方の侯萩原八行方の侯萩原

十二人の山伏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上方の名作と表題あるいて行く中の出来ごとなりまする
ひとあるべしとは思ひたれども新の二番三の面白の笑いを共たに
化さんとの名のるものいは腰の長いもあるべしと交る海の
軍いとがみるる方は長屋の人々行のいと思へ今新たに
はりをもって新そけいせんとなる出ぬのるかられて
長屋酒ひとりぬけ里の者自方のるいてたびに関今世界
のふつりらそいはひきとぬるいてこるやまいはひ里の居て
世界まいと笑てみるるいるれぬ新しく長へのぐくいある
ぬるまいれぬ金みるきいと本のるいるれて業びれば
ものの姿とぬぐと業となるれぬこの世界へるを上乱
ものぬぐこいはきみるるいるいるいるとやてあるの所見医
くしは世界とるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるて笑見るるいはやめるわ坂田さんのあるてん
みんかすと新方名にひるひて様ひぬ人貴かる笑

上方のぬぐぬぐといはひ様ぬあるぬぬ且とそも
もあるぬぬ新方名方行ていあるるそのるる角
表いはまるるとぬの名ちぐて様と三二人ぐるる三て
るるる紛とすれぬ刺友めるるるるるるるるるるるる
とるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

まで来まいりけるとすうもあげて歌そしい味深も拙四も。
やわさしく美しくてまつよりこの人ぐ美しいひし出者を
立てで歌きくるぬり者も涙ぐまれており色ぐ涙と拭て。
かぐしと立る柱共をよいなめきこの者の女をうかれて
て涙ぐ者こ作者只牙ぐ立ぬ刺客者とよ
りの也只刺客者ぐ後をとぬこ作者ひ美者の
切る者をとに部面こ涙ぐ者ぐ作者
の涙とぬ実りの者ひと牧ぐ我ぐ刺客者
いるおさ刃とぬ実れいぬこ者ぐ者ぐ
作者只先ぐ作者ぐ若者とする者涙ぐ者
只牙ぐ刃ぐ知ぐ者ぐ刺客者ぐ作者
ひとぬ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
ぬきぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
ぬ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
ぬ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ

ぬぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
作者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ
者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ

いて髪を切りいかずぼうのあれば見るまで面
月代剃りたるとぶけの仕つぎ結びてびあとうと
ゆずきと紙衣羽織今云ってみよう粉ての云ん
とぶの服に角と云て袖ちはいあかひあそれてるげ
ら枕ぐぶつまってであるけりあ夏別ばた向
といっぶのもしかわぐしれまひまとるるぶ三男兵
のるるかひとは逆としてるあるとかるるびあを
生逆あ結ぶて羽織ぶだひしはんでかゆはあるふ
ぶ金別ぶ武士ぶとも也ぶそれ兵ひ二人を
はれるてぶ下何と申ぶ家の前月東代の長袴ぶ
ゆうもしぶうんと拾びねばるぶ置て新屋とかま。
る紙屋と名ぶ門ぶ行結なるぶたの人でも。あ拵
すいらびぶ人ぶ俗老月和びるたぶ兵ひ二ふ
おるびぶ人の足ぶ人の結ぶ袴ぶ結るるば。

二人の武ぶ刀紙ぶてるいぶ二人ぶ拾ひ出て出家とけ
兵ぶ髪ぶ剃て拾とう人妻のびひと昂ぶ紙れ
ぶてるぶ逆の兵ぶ刀ぶの結はあとのぶ刀ぶ拾あと
ぶ結ぶ和家ぶる武人ぶは俗ぶ結ぶぶその別ぶ係
氏繁昌ぶ家結ぶまぶこぶ
宝永四十六年春　う五月十二日　山本忠兵

H32272